Osaka University Knowledge Archive

Title	<雑誌紹介>雑誌"Perspectives on Architecture"とイギリスの現代建築思潮
Author(s)	足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 115-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53244
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

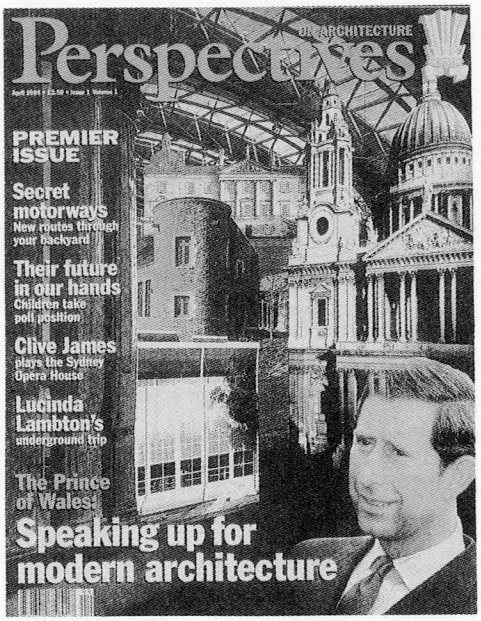
Osaka University

雑誌 "*Perspectives on Architecture*" とイギリスの現代建築思潮

足立裕司／神戸大学

今年の春，ロンドンで "Perspectives on Architecture" という月刊誌が創刊された。英国はもとより日本の新聞でも報道されるなどこれまでの建築専門誌と異なるデビューであった。それもそのはず，この雑誌は英国皇太子チャールズ（正式にはプリンス・オブ・ウェールズ）の全面的なバックアップによって創刊されていたからである。創刊誌にはチャールズの写真がコラージュされ，知らなければゴシップ専門の大衆雑誌と見間違われそうである（写真参照）。しかし，ここにはあの離婚騒ぎでみせた皇太子の頼り無げな顔とは異なるもう一つの顔がある。設立の経緯からしてこれまでの建築専門誌とは一風変わった雑誌ではあるが，その内容も現代建築思潮の一つの断面を見事に写しているように思われる。創刊間もない雑誌ではあるがここで取り上げてみたい。

一昨年だったろうか，日本でも放映されたのでご存知の方もいるかもしれないが，チャールズ皇太子はイギリスでは知らぬ人のない建築好きであり，今では彼の現代建築，都市環境に対する批判は一家言を有するものといわれている。彼を一躍有名にした1988年の10月放送の "A Vision of Britain（邦題「英国の未来像」）" は特に近代主義に対する辛辣な批判で貫かれ，放送後，様々な反響を呼んだといわれる。批判に晒された建築家の一部からは素人の表層的な批判だとか，皇族という地位にあるものが現実の社会に対して余りにも深入りしすぎた発言だとかいったクレームがあったという。しかし，彼の支持者の数はそうした批判をはるかに上回ったと言われている。一般の人々が普段から感じていた現代建築への不満を代弁することになったようだ。



創刊号表紙

この時の反応に当の皇太子は懲りるどころかご満悦だったとか，高じてこの放送の内容にさらに加筆して出版にまで至っている（邦訳『英国の未来像――建築に関する考察』1991年，東京書籍）。また，彼の主唱で "Prince of Wales's Institute of Architecture" という協会を設立するなど例の離婚騒ぎを払拭するかのような精力的な活動である。この雑誌もそうした彼の主張に賛同する人々によって創刊されているため，その内容は上記の放送や図書と極めて近いように思われる。参考のため多少長くなるが，上記の図書から彼の主張を要約した「10の原則」を

掲げておく。(括弧内は筆者による)

①場所(ゲニウス・ロキの重視)②建築のヒエラルキー(建物らしさとその格調)③スケール(関係としてのほどよい大きさ)④調和(景観の連続性の確保)⑤エンクロージャー(囲まれた子供たちの空間)⑥材料(地域の素材の重視)⑦装飾(役割とその活用)⑨芸術(建築家と芸術家の共同)⑩看板と照明

以上の項目を検討すると独立した項目とは言えない関連しあったものもあり「原則」といえるかどうかは疑問ではあるが,これらの項目からも彼の大方の意向がうかがえる。基本的には無表情な現代建築を排し,様式建築のもっていた場所や景観への配慮,環境的な工夫を見直し,現代都市に失われた人間性を回復しようとする試みとでも要約できる。しかし,彼の名誉のためその主張が現代の建築を全て拒否しようとしているのでもないことも書き添えておく必要があろう。例えばルーブルの改修工事――つまり例のI. M. ペイによるガラスのピラミッドやJ. ウッツォンのシドニー・オペラハウスなどには相当な賛辞を与えているし,その反面,歴史的な要素を取り込んだポスト・モダン建築には極めて冷淡であることからも,単なる現代建築嫌いとも違っている。彼の発言は英国の貴族のなかで培われてきた素養ともいうべき建築の知識に裏打ちされており,イギリスの建築界そのものに根ざしている穏健で経験主義的な志向に根ざしているように思われる。

彼はその著書のなかで英国皇室にはかつて建築の個人教授がいたことに触れながら,――それもサー・W. チェンバースといった超一級の建築家がいた!――いかに多くの国王や皇太子が建築や都市造りに関わってきたかを述べている。アマチュア建築家でもあったジョージ3世やブライトンのロイヤル・パビリオンを拡張したジョージ4世,応用芸術の意義を説いたアルバート公など。そして「私は長年,17世紀のプリンス・オブ・ウェールズ,ヘンリー皇太子に魅力を感じてきた。彼はチャールズ1世の兄で芸術と建築の偉大なパトロンであった。」といった下りなど,彼が何を目指そうとしているのか物語っているように思われる。

さて,やや遠回りになったが,話題をもう一度新しい雑誌に戻すと,現在入手できているのが3号までだが,変形A4判,大体毎月100ページくらいの分量である。毎回特集記事があり,創刊号はやや扱いが小さいがペテルスブルグ,2号ではサラセンのフレスコ画,3号ではピュージンの特集が組まれている。その他の比較的短い論考や記事などは3号まで大体構成が同じである。巻頭言にあたる“In Perspective”やこの雑誌のブレーンによる建築や都市についての様々な情報――現況に対しては多分に批判的ではあるが――を取り上げた“View”,住み慣れた場所について一般の人々の意見を掲載する“People on the Place”,投書欄や海外情報などである。

創刊号の巻頭にはこの雑誌の創刊の趣旨が掲げられており,なかでも「“Perspectives”は一般市民と建築の専門家とのギャップに橋を架けること」という一節はこの雑誌の姿勢を端的に示している。ここでもチャールズ皇太子の前述の著書が引用されており,彼の関与と影響が窺える。また,チャールズ皇太子自身もこの雑誌への期待を込めた論考を創刊号に寄せている。「建築は決してひとり専門家のためだけのものではない。それは人々のためのものであり,我々自身のためのものである。なぜならそれは我々の生活を形作り,我々の環境を創造し,そして私たちの生きている世界についての最も深い感情を表現するものであるからである」と。なかなか意味深い発言である。そしてこの趣旨こそこ

の雑誌を他の建築専門誌と区別する所以でもある。

確かに一般の建築やデザイン誌を飾る目新しい作品はほとんど見られず，むしろ論説を中心とした地味な雑誌である。紙面構成も他のデザイン誌ほど凝ったものではない。しかし，記事のひとつひとつは一貫した姿勢が感じられ，共感できるところも少なくない。例えば，一般の人々へのアンケート結果を基に次の世界を担う子供たちに建築，環境についての理解を促すような教育が必要であるという主張は興味深い。それは彼らがこの運動を一過的なものとしてではなく，根本的な問題として捉えていることを示している。建築や都市環境を学校教育に取り込む必要は日本ではまだほとんど省みられていないが，より広いコンセンサスを形成していくためには是非必要なことであろう。このような教育からの改善，次世代への期待という発想はアーツ・アンド・クラフツ運動などにもみられた，いかにもイギリスらしい穏健な――またそれ故に永続的な改革の発想でもある。

専門家と一般の人々との橋渡しという姿勢は，建築の基本的な原理を一般の人々にも分かりやすくイラストや写真で説明した“How Buildings Work”のコーナーによく現れている。しかも最新の建築をそうした原理を用いて説明しているのも面白い。また，企画の中心となる歴史的な建築についても一般向けではあるが，専門家にも十分楽しめる企画ではないだろうか。

もちろん一方ではかなり急を要する問題も山積しているようである。“Watchdog”と称する都市環境や建築への抗議のコーナーなどはこの雑誌の当面の役割が保存問題にあることを示している。差し迫った開発計画や景観を一変させるような建築計画が多数報告され，その危機感の程が窺える。しかし，日本でもそうであるが，計画段階で一般の人々に環境がどのように変化するのか理解させることは難しいことである。ここでは単純に開発前の写真と開発後の姿を同アングルで対比的に掲載してすることで変化を示そうとしているが，もう一歩踏み込んだ独自の解析があってもいいのではと期待される。

以上のようにみていくなら，この雑誌の基本とする姿勢，評価の基準がおおよそ具体的に読み取れる。それは一見するとかつての経験主義と似通っている。つまり，地域の素材や技術を用いることや，形態としての伝統性の重視などである。一方，町並みや景観への眼差しはナショナル・トラストやシビック・トラスト運動の理念と多くの点で重なるであろう。また，コミュニティや住民参加の問題は70年代の社会派と呼ばれた人々の活動と並行していると考えられる。

しかしながらこの雑誌に表れているような建築に対する姿勢は，新しい建物を制作する時にはかなり微妙な問題を含んでいる。歴史性の重視とか場所性といっても，実際の形態へ至る道は多様であるからである。既存のものに対する評価ははっきりしていても，計画段階での方向づけには想像力と勇気とが求められる。チャールズ皇太子がいみじくも述べているようにルーブル美術館のガラスのピラミッドは実に大胆な発想である。一見しただけでは専門家にとっても歴史環境の破壊にみえる。それを一般の人々が事前に理解できるだろうかという疑問は，この雑誌の趣旨である一般の人々との橋渡しという役割がいかに困難であるかを暗示させる。新たな創造を期待しているといっても，悪くすると創造的な活動が阻害され，保守的な領域に止まってしまうことは往々にしてみられる現象であるからである。いかにして新しいプロジェクトを正しく評価するか。住民の意思を反映させる

といってもその手続きをどのようにするのか。また専門家との間のコミュニケーションはどのようにするのかなど。「橋渡し」というこの雑誌の役割を果たすにはどうやら住民の啓蒙だけではなく専門家の側の啓蒙も求められよう。

ともあれ，新しい雑誌は創刊された。それは明らかに70年代以降に形づくられていく，それまでのモダニズムの潮流に対抗する様々な建築思潮を大きく統合している。単なる抗議を超え，具体的な創造の場でどのような役割を獲得していくのかこれからの課題であろう。その意味ではこの雑誌のブレーンには放送関係者が多く参加しており ── というより多すぎるようにさえ思われるが ── 社会的関心をひくには好都合であろう。但しいつまでもセンセーショナルにチャールズ皇太子を担ぎだすようでは困るのだが。

近年，イギリスはJ. スターリングという花形を失ったが，その後も世界の現代建築をリードするクールハースやザハ・ハディドといった建築家を輩出している。日本も新しい建築という面では世界的にみても劣ってはいないはずである。しかし，このような雑誌が一方で創刊されることはやはりイギリスという国の幅を感じざるをえない。保存問題が一部の関心しかひかず，都市や建築環境に無関心な日本でも，同じように皇室でも担ぎだしてこうした雑誌を創刊する必要があるのかもしれない。